

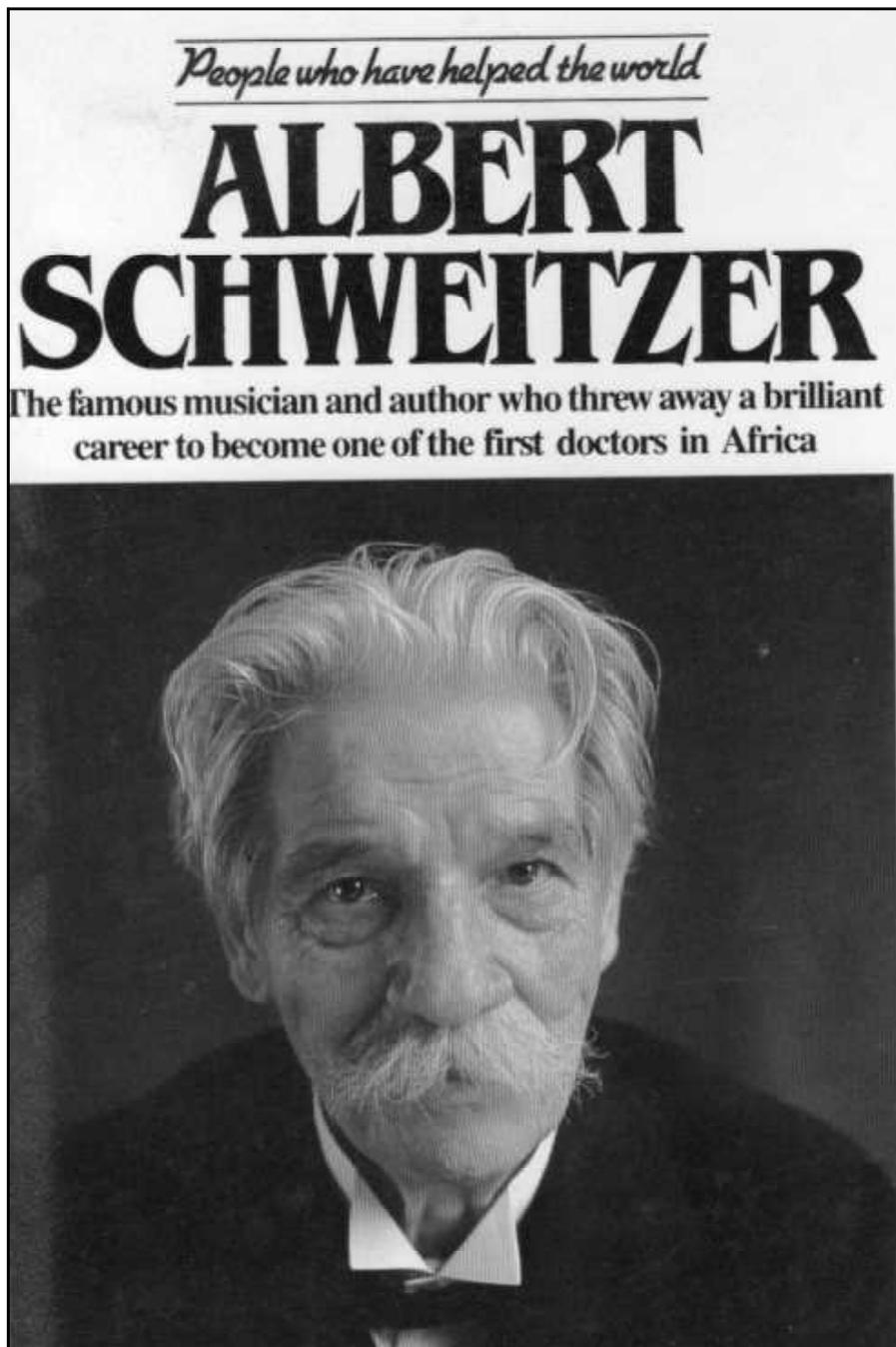
8章・REVERENCE FOR LIFE: **ALBERT SCHWEITZER**

— *If we could become what we were at fourteen.....* : (1875–1965)

第1節・(My) first meeting this book that impressed me.

《◇-1 : シュバイツァーとの出会い》

【写真】 シュバイツァー (*15)



シュバイツァーは、アフリカで黒人のために医療活動を通し一生を捧げた人物であり、また、「神学者、哲学者、音楽家、赤道アフリカの医療伝道者、ゲーテ学者であると言われている。その生涯にゲーテ賞（1928年）、ノーベル賞（1954年）など様々な榮譽を受けている。私がシュバイツァーに興味を持ったのは、こうした有名人だからではない。また、私は社会科の教師でもあるが、その社会科の教科書に彼の名前が載っていたからでもない。

それは、（種々のことから）教師に余り好かれておらず、全く勉強と無縁であった中学校時代に、国語の試験問題でシュバイツァーの14才の心、「私たちが14才当時の少年の心になることができたならば、世の中はどんなに変わることであろうか」という文章を読んでからである。

確かに全ての人々が純粋な少年の心を持ち続けていたら……と思った。そのときこの言葉に惹かれ、それ以降この言葉が頭の片隅に残っていた。縁あってこの短大の講師になったとき、再びこの言葉を思いだし、シュバイツァーを短大のテキストにすることにした。そこで短大創設時より『**My childhood and youth**』（南雲堂）（*2）をテキストにした。

しかし、このテキストには肝心の「14才の心」の箇所が省略されていた。そのため、今回この『求め続けて』で、その箇所を補うことにした。しかし、この欠けていた箇所を入手するには後に述べるように約10年かかった。

尚、シュバイツァーを第三部の最初に掲載したのは、それ以外の理由も含めて以下4点からである。

- ①この短大の創設と同時に、このテキストを使用し、第三部短大時代の幕開けとしたいこと。
 - ②「14才の心」が今回の第三部の原点であること。
 - ③私の存在を表すのにもっとも適したテーマであること。
 - ④最後に、正直に言って、私の一番苦手な分野が国語も含めて語学関係であり、短大当初の頃のひどかった授業も含め、この短大の授業風景などを知って貰いたかったことである。
- そして、現在の学生諸君も、この短大創設時のことを知っておいた方が良かったことが、シュバイツァーを第三部の最初に掲載した理由である。

《◇-2：岡山短大創設時の授業の思い出》

1983年当時を振り返ると、懐かしくもあり、苦々しくもある授業を通しての思い出ばかりが残っている。

この短大に来たのは、短大が創設された初年度1983年度である。その前年、相棒の如く存在であったSM先生（私よりも20歳年上でこの短大で物理担当）から、「法学」と「経済学」を担当しないかという話があった。

この二教科は私の専門に近いので、話を聞くため当時の校長とお会いした。そのとき「英語」も担当すれば、専任にするとのことであった。専任ならばこの3教科（前期・後期の関係で実質2教

科分)は頑張れば担当できると考えた。

しかし、行財政改革の関係で、1983年度からの専任は無理で、しばらく専任になるのに期間がかかりそうだという連絡を受けた。非常勤ということになれば、短大だけでは生活ができないので、当時の生計の中心であった駿台予備学校と進研予備校の「政治経済」をやめることはできない。

しかし、掛け持ちでこうした教科数は不可能である。「英語」だけならば「政経」と掛け持ち可能かと考え(その理由は補章-3参照)、残りの教科は大学院時代の友人HT君(後にAMさん)に依頼した。こうして、この短大での「英語」の授業が始まった。(尚、その後13年経っても専任にはなっていないが)。

この短大で、まず思い出すのは初年度の授業である。岡山から短大まで、まだバイパスが貫通していなくて、倉敷市街地から短大までは混雑した玉島大橋を経由し、短大に通っていた。待ち受けていた学生はかなりユニークであった。確か27才くらいを筆頭に20代の学生がごろごろいた。

香川大学を卒業してきた学生や、東京の大学(成城大学か成蹊大学?)を中退してきた学生などもいた。

授業中に犬が毎週入ってきて教室を歩き回ったこと(誰かが連れてきたのか?)など、なかなか面白い思い出が残っている。授業に真っ赤なチャンチャンコを着てくる学生もいた。もっとも、それは当時冷房はおろか、暖房も大きな教室に小さな家庭用のストーブが1、2個あるだけで、暖房はないに等しかったことによる。冬は授業中かなり寒かったので仕方なかったのかもしれない。

ただし、ひどいことにストーブは、生徒の一部が独占し、教師の所にはぬくもりのかけらすらこなかった。授業中に、ストーブに悪戯した生徒のため、教室に臭いが立ちこめたこともあった。

しかし、それ以上に大変だったのはやる気のある生徒がごろごろいたことである。従来ならばやる気のある生徒は歓迎するが、先に書いたように当時確か火曜日から金曜日(翌年は月曜日から金曜日)は京都の駿台予備学校で「政経」を担当しており、金曜の夕方に岡山に帰り、土曜の朝、この短大で英語を教え、昼の1時から岡山の進研予備校で「政経」を担当していた。

そして、第二部で書いたように駿台では失敗の許されない舞台であったため、「政経」は四六時中思考し、資料を捜し、文献を読んでいた。そのときにしわ寄せが来るのが「英語」である。

ところが生徒はやる気がある。もともと、このような状況では過去の反省から他教科はもたないのであるが、専任にするという確約と、「英語」という教科は社会科と異なり、一定時間をかけ文献を捜し、後は生徒に訳させ、誤りを訂正し・解説すれば、それで終わりと思っていた。そこで何とかかなるとも考えていた。

だが、生徒は全体に非常に真面目で、特に熱心な生徒もかなりいた。といっても、シュバイツァーのテキストが全く理解できない語学力の生徒が大半であった。だから、Schweitzerの「My Childhood and Youth」では、当時何ができると考え、毎回、本をコピーし、各文(1行)ごとに切り抜き、説明しやすいように並べかえ・貼り直した。そして、朝、目が覚めるとすぐに印刷するために学校へ行った。朝4時、5時に学校へ着き、車の中で本館の玄関が開く時間まで寝たこともしばしばあった。

アパートで目覚めてから、もう一度寝ると京都での疲れから朝起きられないため、そうしたので

ある。そして、印刷に取りかかるが印刷機は現在と違いファックス（ファクシミアではない）式機械なので1枚を原紙に写すのに、7分～10分、その後に印刷（輪転機）でうまくいっても10分以上かかったように思う。一種類につき合計約20分くらいかかっていたのではなかろうか。それを何枚も刷る。

しかし、当時の授業の内容は十分ではなく、授業1時間当りに割いた教材研究の時間は政経などに比べればゼロに等しく、当時の学生に対しては——今、思い返してもそうであるが——当時も何かうしろめたい感じを覚えていた。はっきり言って、当時の授業は授業とは言えないものであった。一つの新しい授業の準備に1日若しくは1日以下しか時間を割かない場合、教材研究はゼロに等しいとは今でも思っている。実際にも、そうであると思う。

だが、それでもSchweitzerはまだ説明することがあるから良い。問題はもう一つのテキスト『HELEN KELLER』（*16）{当時はテキストを2冊にしていた}である。この本は、易しい短い英文のため、多少難しい単語があっても、文が短すぎて説明のしようがない。文を分解してコピーし、貼り直すことすらできない。学生の訳を訂正し・説明したらおしまいである。

私が当時思っていた授業としてすら成り立たない。必要以上の文法説明は逆効果である。その上、文が短いだけに、たまに分からない箇所があっても論理的に検討できない。

また、私は中学時代は余り英語を勉強していなかったため、英語勉強は大学入試の一部と大学院入試での英語だけなので、社会科学の専門書よりも、逆にこうした初歩的文献の方が訳が困難な場合があった。

特にSNOWMANという単語では完全に勘違いし、雪男と訳した苦々しい思い出がある（※注1）。専門書では出てこないし、易しい単語なので辞書引きもしなかったためである。もっとも、そのおかげで後に視聴覚教材『SNOWMAN』との出会いが生ずる。

当時、こんな授業ではいけないと思いつつも、英語の授業とは簡単な背景の解説プリントを出し、そして生徒が訳して、それを訂正して、解説（解説プリント配布等）して終わりと考えていたため——今まで中学校から大学院まで、そうした授業しか受けたことがなかったので——何をしたら良いか分からなかった。

おまけに、熱心な生徒の一部が家でカセットを聞き相当読む練習をしてくるため、彼らの方が発音が良く恥をかいたこともあった。

私は田舎で育ったため、ラジオの教育放送は受信できず、ラジオ講座等は聞けない。テープレコーダーは中学生初期の頃は存在すら知らなかった。その後もカセットを買う金がなかった。唯一の頼みであった高等学校でも、ひどい発音の先生も一部いたため、正しい英語の発音を聞いていないのである。さらに生まれつき音感の悪いこともあり、こうした事情のため発音が良くなく、発音でも苦労した思い出がある。勿論、今も苦労している。その上、既に書いたように時間的制約があり、全く手の出しようがなかった。

だから、当時の真面目な生徒に対しては申し訳なく思っている。同時に、彼らに懐かしさも感じている。

昔、東京で、関東の職業訓練短期学校について、ある出版社で次のようなことを聞いた。「あの学校に通っている生徒は、学力的なことは知らないが、真面目でこつこつ勉強する者が多い」ということであった。

正に、1期生の頃はそうした表現がぴったりであった。また、授業中、クラスによっては中学校の授業のように簡単な英文法のプリントを配布して、分からない生徒に手を挙げさせ、説明して回ったこともある。

このような形の授業をもっと発展させ・時間をかけ・きっちりさせた所で、最近思う「授業とは作品である」という発想からはほど遠いが、こうした短大初期の授業の形を発展させた牧歌的な授業形式も決して嫌ではない。年をとったら、こうした形にしようかとも考えている。今でも、場合によっては、しても良いとすら考えている。

駿台時代の気迫型の授業も良いが、大したプリントでなくても、それらを手取り・足取り、のんびりと一緒に勉強するという授業に興味は今でも持っている。もっとも、当時の授業は、重ねて言うが、授業の準備にかけた時間からいって、授業をしたとはいえなかったかもしれない。その理由は駿台などによる時間的制約と、英語の授業とは何か全く知らなかったということを重ねて強調しておく。

しかし、その後、意欲のなくなった生徒が増えたこと、また大学の授業では多くの責任をさせられていないと肌で感じたこと、そしてとりわけ当時の駿台での超多忙な生活とトラブルにより精神的にも肉体的にも限界となったといったことなど（補章—2参照）から、その後の短大の授業は事実上あらゆる面で完全に「無の内容」となり（不毛期）、教材についての取り組みは短大2期の1988年度を待たなければならない。短大2期の授業との出会いについては、9章と10章で述べることにする。

※注1：Snowmanとは雪だるまのことを言う。雪男も一部の辞書では「Snowman」と掲載している辞書もあるが、一般には誤解を避けるため「abominable snowman」とか、簡単に「yeti」という。

《◇—3：新たな出発と14才の心》

今回、シュバイツァーをプリントに取り上げたのは、1993年末から再々度出発をするに当たり、どうしてもシュバイツァーの「14才の心」が必要だった。それは第三部のテーマ「こころ」の授業の出発点だからである。授業の導きの糸「こころ」への出会いについては9章、10章、11章と順に読んでもらえば分かると思うし、また読んでもらいたいと思う。できれば11章まで読んだ後で、もう一度この8章を読めば、この第三部の意味が理解できるであろう。

これから、再々度出発した短大-3期（1994年）以降に、どのようにしてこのプリントの資料を入手したかを以下箇条書にする。それにより、私の「14才の心」への「想い」を理解して貰いたい。

- ①本屋で、この「14才の心」の箇所を探したが入手できず。
- ②テキストの出版社に問い合わせ、海外発注をしたが入手できず。
- ③ドイツ語のシュバイツァーの自伝を入手したが、欲しいのとは別本であった。
〈以上1980年代前半〉
- ④再度海外発注（発注不可能な絶版か？）
〈以下1994年以降〉
- ⑤テキストの出版社南雲堂にコピーを依頼するが、出版社にも原本がなかった。

⑥南雲堂出版社が、シュバイツァーの『My childhood and youth』（*2）の編注者水口志計夫立教大学教授に（私の依頼ではなく）好意で連絡をされた。水口教授の御厚意により、ようやく、この必要な箇所が入手できた。その一部を掲載したのが（3）My favorite words and sentencesである。もう一度、水口教授及び南雲堂編集部HB氏に感謝すると同時に参考までに——「14才のころ」の箇所への私の想いを知ってもらいたいので——私の書いた水口教授への礼状の一部を掲載する

謹啓。

私はシュバイツァーの件で南雲堂に問合せをさせていただいた者です。先日、先生から…
…V章（14才の心の箇所など）を直接送っていただき、見も知らぬ私のために、大変お手
数をおかけしましたことを深く恐縮していますと同時に大変感謝しております。誠にありが
とうございました。

V章を必要としていました理由は……今から30年ほど前の中学校の試験問題でシュバイ
ツァーの「14才の心」や「理想の力」……を見て、試験中にこの言葉が深く心に残り、そ
れ以後もきれいなものを見てきれいと感じるようなそうした心、というものに憧れつづけて
きました。

……授業で自分を表現するためにもこの箇所が欲しかったわけです。……（いろいろ努力
しましたが）入手できず……人間の生き方を問う教材づくりを再度目指そうと思ひ立ち、…
…マザーテレサ、ラッセル、キング等々の資料の必要箇所をできる限り集める努力をしてい
ますが、（そうした教材づくりのためにも）やはりシュバイツァーの「14才の心」の箇所
は私の原点ですので欠かしてはいけないと再度強く思うようになり、……そこで、考えた挙
げ句、迷惑を顧みず南雲堂に問合せをさせていただいたわけです。

そして、今回先生の御厚意により、この箇所を入手することができ、どれほど嬉しかった
かわかりません。深く感謝いたします。この文章（シュバイツァーの「14才の心」）を利
用して、私の目指す授業に一步でも近づくよう努力していく所存であります。……

※水口志計夫先生には、その後も年賀状でお礼を記し続けていたが、2005年8月3日に逝去
された。（享年79歳）

《以下、ウィキペディアより》

①水口志計夫（みずぐち しげお、1926年 - 2005年8月3日）は、英文学者、立教大学名誉教授。
仙台生まれ。1950年東京大学英文科卒業、立教大学助教授、教授、1992年定年、名誉教授。『コン・
ティキ号探検記』の翻訳で知られ、以後も探検ものを多く翻訳した。日本バートランド・ラッセル
協会設立発起人の一人。

②株式会社南雲堂（なんうんどう）は、語学研究書、大学向け教科書、小説、マンガなどの出版
社。英語の語学出版社としては老舗である。おうふうは、ここから分岐した出版社である